

2019年横浜ナザレン教会終末主日礼拝

「主が支えてくださる」詩篇3

【聖書テキスト】

詩編 3:1【賛歌。ダビデの詩。ダビデがその子／アブサロムを逃れたとき。】

2 主よ、わたしを苦しめる者は

どこまで増えるのでしょうか。

多くの者がわたしに立ち向かい

3 多くの者がわたしに言います

「彼に神の救いなどあるものか」と。〔セラ

4 主よ、それでも

あなたはわたしの盾、わたしの栄え

わたしの頭(あたま)を高くあげてくださる方。

5 主に向かって声をあげれば

聖なる山から答えてくださいます。〔セラ

6 身を横たえて眠り／わたしはまた、目覚めます。

主が支えていてくださいます。

7 いかにも多くの民に包囲されても／決して恐れません。

8 主よ、立ち上がってください。わたしの神よ、お救いください。

すべての敵の顎を打ち

神に逆らう者の歯を砕いてください。

9 救いは主のもとにあります。

あなたの祝福が

あなたの民の上にありますように。〔セラ

1 伝道礼拝のテーマ

今日は伝道礼拝。まだイエス・キリストを信じていない方達に「教会が信じる神とはどのようなお方か」、「イエス・キリストの父なる神さまを信じるとはどういう事か」を礼拝を通じてお伝えしたいと願いささげるのが伝道礼拝です。伝道礼拝のテーマは、周りの人々との交わりから与えられることがあります。教会に仕える牧師は、様々な人生の場面に立ち会います。そのお一人お一人を自らの心に置き祈り続けると、不思議なことですが、「この命の言葉を握って生きて頂きたい」という聖書の御言葉が示されることが度々あります。そのみ言葉をその時々教会に与えられた言葉として受け止め、伝道礼拝のテーマとすることがあります。

ですが、今月のテーマ「神に支えられて」は順番が逆でした。きっかけは高校生との聖書の学びでした。高校生に「あなた自身をかけがえなく思い、心から愛する天の父なる神を知ってほしい。そしてこの神の愛に支えられて生きて行って欲しい」。神を知らずに若い時を過ごした実感が言葉となって出てきました。この言葉を口にしてから、「神に支えられる」というのは聖書のどこから来たのか、調べてみました。そして、見つけたのが詩編3篇の6節、「身を横たえて眠り、わたしはまた、目覚めます。主が支えていてくださいます。」です。

## 2 詩編

さて詩編のことをある人が「聖書の中の万葉集だ」と言いました。万葉集は防人の歌なども含む、民衆の心情をつづった歌が多い歌集だと言われています。詩編も神殿の礼拝祭儀で歌われた歌であると同時に、一般信仰者の心情を率直に歌った詩が多く、人々の生活の傍らにあった祈りの詩だと言われています。母親が赤ん坊をあやしめながら、漁師が舟の上で魚を待ちながら、農夫が土を耕しながら、羊飼いが羊の世話をしながら、主婦が糸を紡ぎながら、口ずさんだ祈りの詩。あるいは、眠れぬ夜に床にあって闇の中に目を凝らしつつ、詩編の言葉で神に祈った人々もいたでしょう。代々の信仰者たちは、詩編の一つ一つの言葉を口ずさみ、詩編の心を、神への祈りの小道としてたどってきました。だから「詩編は祈りの教科書」とも言われています。詩編の祈りには、天地の創造者なる神と、被造物である我々人間とのまっすぐな関係が描かれているからです。私達人間にとって神を神として祈る事は案外に難しい事、知らず知らずのうちに神に自分の欲望の実現を押し付け、神に指示を出すような祈り方をすることが多いのです。詩編の詩は、そのような私達の祈りを、正しい調べへと変えてくれます。プロの演奏家は、コンサート前に楽器を正しい音律に合わせる為にチューニングしますが、私達の祈りも、詩編の祈りの正しい音律に合わせてチューニングをする必要があるのです。そうして、神の御許へと届く祈りへとその音律を変えて頂きます。今日は詩編3篇の祈りの小道を一緒にたどり、神がどのように私達を支えて下さるのか、共に見ていき、私達の祈りを正しい音律へとチューニングしたいと思います。

## 3 ダビデの詩？

さて、3篇の冒頭にはこうあります。【賛歌。ダビデの詩。】—ダビデとは、言わずもがな、イスラエルの歴史に燦然と輝く偉大なる王、12部族をまとめ、周辺民族との戦いに勝ち、強固な統一国家をつくった優秀な政治家であるとともに、深く強い神への信仰に生きた人、信仰の人として聖書には描かれています。さて1節はこう続きます。【ダビデがその子／アブサロムを逃れたとき。】これはダビデ王の晩年に実の息子であるアブサロムに裏切られ叛乱を起こさ

れるという大事件の事です。アブサロムが父ダビデを裏切るようになるまでのいきさつも、人間の真実をついたドラマで読み応えがあります。人の罪が憎しみを産み、憎しみが罪を産み、素直な心の交流ができなくなり、疑心暗鬼が支配し、家族関係が破綻していく様子が描かれています。今日、詳しく語る時間はないので、読んだことのない方、読んでも忘れていた方は、是非一度サムエル記下13章から19章を読んで頂きたいと思います。さて、ダビデの息子アブサロムは、用意周到に準備を進め、イスラエル12部族の多くを味方につけて、父ダビデに対して反旗を翻し、大軍を率いて都エルサレムに迫ります。息子・アブサロムの反乱軍を前に、ダビデは少数の者を連れて都を立ち去り、ヨルダン川の向こう側まで逃げます。その時に歌った歌が詩編3だということです。

本当にダビデ王が歌った歌なのかは確かめようがありません。おそらく詩編を編集した編集者達が、ダビデの生涯の中から「この場面こそ詩編3がうたわれる背景にふさわしい」と考え、詩編3の祈りの心を伝えるために付け加えたのではないかと多くの聖書学者達は考えています。信仰者達はダビデ物語をよく知っていたので、アブサロム事件と言えはすぐにどういう状況で祈られた祈りが分かったのです。ですから詩編3の祈りの背後には、息子や親しい者達に裏切られ、命の危険が迫る窮地ほどの孤独があり絶望的な状況があったことは確実のようです。そして同じように孤独で絶望的な状況にあった人々に大きな力を与えてきました。

#### 4 孤独と絶望

子どもに叛乱を企てられ、命を狙われる…というような状況に追い込まれる人は稀でしょう。しかし、周りの人々に裏切られる、もしくは裏切られると思い、途方にくれる…という経験をするにはあるでしょう。大きな困難の中に叩き込まれ、孤独にさいなまれるということは、人間に罪ある限り、どんな人にも起こり得ることですから。詩編3の詩人もそうでした。2節から3節、詩人は自分に敵対し、自分を否定している人々が際限なく増えていくことへの不安と恐怖を吐露しています。

3節「多くの者がわたしに言います「彼に神の救いなどあるものか」と。この「神の救いがなどあるものか」とはどういう事でしょうか。3節の「わたしに言います」を直訳すると、「わたしの魂に言います」です。ヘブライ語の「魂」という単語のものは、「喉」という単語だそうで、そこから「魂」には「ここが傷つくと命に関わる場所」という意味があるそうです。その命の造り主は、創造者である唯一の神です。神の御心がなければ私達は生まれてこないし、生きていくこともできません。命が与えられ生きているということは、「君は私にとっては生きる価値がある、良い命だ」という神のメッセージとも言えます。この神の愛のメッセージにまっすぐに生きることが私達の救いと言えるでしょう。だとすれば、3

節で敵は、詩人の命そのもの、存在そのものを否定するような言葉を投げつけているのです。神に喜ばれてある筈の命を否定しています。「彼に神の救いなどあるものか」というのは、「彼に生きる価値などあるものか！」と言い換えられると思います。それも一人や二人ではない、多くの者が「お前には生きている価値はない」と糾弾している、声に出さずとも、そのような態度をとる。こういう事は私達が造り上げている現代社会でもよくあることです。

この時の「私を苦しめる多くの者」とは誰でしょうか。状況によって異なるでしょう。病気であることもあるし、社会そのものという事もあります。経済的な困難であるかもしれないし、会社での上司や同僚など仕事関係の人々という事もあり得ますし、配偶者や子供など家族ということもあるでしょう。そして、何より、自分自身。自分が自分自身を受け入れない、「生きる価値などない」と告発する。誰でもない自分自身が自分を告発するのですから、逃げ場がありません。これは本当に苦しいことです。そういうことが私達の人生には、度々あります。何故なら、神を知らないこの世では、命のランク付けをするからです。富や地位、能力、美醜、あらゆることで区別し差別し命の価値を測る世界です。そんな世界は、神なしで生きていきたい、自分が自分の神でいたいと願う私達人間が造り出したもの。そして誰しもが、自分達が造り出した孤独の中に閉じ込められています。人の命を不安にし、死を想わせる孤独です。

普段、私達は、自分達の造りだす孤独や絶望に気づかずに生活しています。ですが、私達の魂を傷つける孤独と絶望が、ぬっと姿を見せる時があります。自分や家族の病気、経済的問題、仕事の失敗、人間関係のひずみ、様々な困難に遭遇する時。死と不安が私達をのみ込んでいこうとします。

## 5 それでも！から与えられる命と平安

詩人はそのような中で叫びをあげます。4節。「主よ、それでも」と。矢内原忠雄は、「この『それでも』には千鈞の重みがある」と語りました。私もその通りだと思います。もうどう見ても救いはないのです。自分の外側からも内側からも自分の命を否定し損ねるような声しか聞こえない、自分自身の力も尽き果てた、心は不安で揺り動かされている、「死ねば楽になるんじゃないか」と死を想う。そんな時に、この一言、「それでも、主は私の盾、私の栄え、私の頭を高くあげてくださる方！」という一言が言えるかどうか、「私達の命がかかっている」。それほどの重みのある「しかも」。

だけれども、誰がそのような事を言えるのでしょうか。存在を否定する声の中、言い返す力も失われ、気力もなえ果て、将来の希望も絶たれているのに。どうして「それでも主は私の盾」と言えるのでしょうか！「神などいないじゃないか！」と言うしかありません。だから、この「それでも」とは、私達人間の中にある言葉ではなく、神ご自身が詩人に与えて下さった言葉です。

私達にはその事がはっきりと示されています。イエス・キリストが叫ぶ叫びを通して神が与えて下さった「それでも！」だからです。主イエスが十字架の上で叫んだ「わが神、わが神」という叫びがまさに「それでも！」という叫びです。考えてみれば、十字架の上こそ、絶対的な孤独であり、自分の力ではどうにもできない、自分で自分を救うことなどできない希望が絶えた場所、絶対的絶望の宿る場所です。杭に手足を釘付けにされ磔られ身動きできないことを想像するだけで恐ろしさに身の毛がよだちます。しかも、周りに沢山の人はいるのに、自分を助けてくれる人は一人もいないのです。生きる気力を根こそぎ奪っていくブラックホールのような孤独。イエス・キリストはこの絶望の中であって、それでも命の最後の瞬間まで父なる神を神としました。「わが神、わが神」。それこそ、「それでも、あなたは私の神！」という叫びでした。

誰のために？イエスご自身のためにでしょうか？いえ、何よりも私達の為なのです。人生の苦しみの時、命の造り主を見失い、神の方を見ることができなくなる私達一人一人の為に、死と不安に呑み込まれてしまう私達一人一人の為に主は叫んでくださいました。命の造り主、支え主に向かって叫んでくださった！この「それでも！」と叫ぶ御子の叫びはまことに父なる神の御心でした。だからこそ、父なる神はイエス様を永遠の命へと三日目に甦らせてくださったのです。その十字架と復活の主イエスを、私の救い主と私達が告白する時、イエス・キリストの霊が私達に与えられる…と聖書は語り、教会は信じ、そのように語り伝えてきました。

## 6 命と平安

神の御子イエス・キリストの霊が私達の心に与えられるとは、結局、詩編3の4節、「主よ、それでも、あなたはわたしの盾」の「それでも」という力ある言葉が与えられるという事です。この「それでも」は、私達の生き方を変える力があります。どの方向に変えるのでしょうか？4節に盾とありますが、通常の盾は、盾を向けている方向からの攻撃しか防ぐことができませんが、神の盾は違います。あらゆる方面からの攻撃を防ぐことができます。私の命を否定するような、その価値を貶めるようななどのような力からも神は守ってくださいます。そして「頭をあげる」とは、名誉を回復することです。神はそうして私達の命の名誉を回復してくださいます。「あなたの命は私にとってかけがえのない。愛する神の御子を犠牲にするほどに尊い」と私達の命をご自身の名誉としてくださるのです。「それでも！」と声をあげた時、この神の愛が私達の心を満たします。御子を惜しまず死に渡すほどの神の義なる愛が怒涛のように私達の心に押し寄せ、死と不安にさいなまれていた魂を、命と平安の方向に変えてくださるのです。だから、詩人は続けます。5節、6節「主に向かって声をあげれば、聖なる山から答えてくださいます。」身を横たえて眠り、わたしはまた目覚めます。

主が支えていてくださいます。」深い絶望の淵から主イエスがあげてくださった「それでもわが神！」という叫びが、私達の命を支えてくださるのです。

## 7 F兄

M. F兄が二度目の脳梗塞の発作のために入院して一週間になります。一昨日の金曜日にも病院に伺いました。「しんどいですか」という問いかけると、うなずかれました。思わず「イエスさまは苦しむ人の傍らにいてくださいます。十字架の上にあっても罪人を招かれたお方です。F兄の側におられない筈はありません。」と言うと、兄は涙を浮かべておられました。その瞳は美しく澄んでいました。F兄の体は前よりも動かなくなっています。他にご病気があります。本当に苦しく、つらい、やるせないと思います。だけれども、兄は、共にいてくださる主イエスと声を合わせ「それでも」と叫び、命と平安の方をむこうとしておられる。私はそんな兄の姿に感動し、いつも弱く苦しむ人のそばに主イエスがいてくださるという確信を新たにしました。

## 8 希望をもって死を迎える

そして昨日は、日本ナザレン教団の方が立ち上げた高齢者福祉を目指すNPO 神奈川キングスガーデン主催の講演会に行ってきました。長く高齢者医療に携わってきたM医師が「私達は家族の死にいかに関わり添うのか？」というテーマで語る講演でした。印象的だったのが、「今の日本は多死社会と言われているのに、医療の発達で選択肢が増え、自然な死に方が分からなくなっている」という言葉でした。数字を交えての具体的で現実的な話を聞きました。長期の寝たきりを産む高齢者医療がいかに関わりその方の命を損なう惨い事なのか…を数字をもって具体的に語ってくださいました。皆さんにも是非聞いて頂きたい内容でした。

また、こうも言われました。「人は突然死ぬのではない。どんな人もだんだんに弱って行って死ぬのだ。弱り方は様々だし期間も様々だが、何もできなくなる状態となり死を迎えることに変わりはない」。これを聞いて、「肉体が死に行くのも命の一部なのだ」と痛感しました。どのように家族や周囲の人たちや医療機関・介護施設がその人らしい死を迎えてもらおうと心を砕こうにも、この死にゆく時こそ、神と本人の問題であり、他の人は立ち入れない時。できれば、最後の時も、迫りくる死の恐れを振り払い「それでも！あなたはわたしの盾」とイエス様の叫びに合わせて叫び、最後の一息まで父なる御神の方を向いて死に赴きたいと願います。

死んでいくのに「命と平安の方を向く」というのは変でしょうか？いえ、そうではありません。キリストを信じる者達に「死」は滅びではないからです。やがて

の終わりの日、甦りの朝、主イエスが私達の名前を呼び、手を取って起こしてくださる、目覚めさせてくださる。その永遠の朝に希望を置きながら、永遠の命の方向を向いて最後まで生き抜き死ぬことを可能とする御子の霊が私達には与えられています。御子の霊を通じて神に支えられる命を生き、支えられて死ぬ…それこそ神の祝福ではないでしょうか。横浜ナザレン教会に集められた神の民のお一人お一人が、命と平安の方を向いて生き抜き、最後まで神に希望を置いて死んで頂きたいと心の底から願っています。

詩編3の詩人がそう願ったように。9節です。「救いは主のもとにあります。あなたの祝福があなたの民のうえにありますように。」苦しみの中で、絶望の中で、孤独の中で呻いていた者が命と平安の方向へと向き直りました。その時、自分だけではなく、共に生きる者達の祝福を願う者へと変えられています。この詩の中には私達がいます。神を賛美せずにはおられません。